

至仏山「東面登山道利用実態調査」報告書

尾瀬自然保護指導員ネットワーク

至仏山東面登山道利用実態調査報告書

至仏山東面登山道の利用実態を把握するため、2000年7月に至仏山東面登山道の開通から20年を記念して、尾瀬自然保護指導員ネットワークが実施した調査結果を公表します。本調査は、東面登山道開通20周年記念事業の一環として実施されました。

至仏山は標高約1,600m、総面積約1,000haの森林限界付近の山林地帯で、主な植生は松林です。また、山頂部には高山植物が見られます。近年では、登山者数が増加し、冬山登山も外れて多くの人が春先に登山する傾向があります。

今回の調査は、山頂までの至仏山東面登山道の利用実態について調査する目的で、1998年7月実施されました。今後の課題を示すとともに、今後の方針について述べます。

1. 実施日 平成10年7月14日（土）～15日（日）

調査日程を複数（14日・15日）とした理由

2. 調査場所 至仏山東面登山道（至仏山～山の湯）

コース：尾瀬原～オホカム～至仏山～露水ノ原～山の湯

～露水ノ原

調査時間：朝晩晴れ（14日：午前7時～午後5時、15日：午前7時～午後4時）

3. 調査者 尾瀬自然保護指導員ネットワーク

調査隊員：佐藤保光正司

監修者：佐藤保光正司

監修者：佐藤保光正司

監修者：佐藤保光正司

尾瀬自然保護指導員ネットワーク

調査内容

調査

調査

をしていました。『新規』ですが、すでに字母が記載している場合は該当 平成 10 年 7 月

平成 10 年度は新規として、各山道方に新規が付属するための認定料を支拂う旨

至仏山「東面登山道利用実態調査」報告書

至仏山東面登山道利用実態調査報告書

本調査は、尾瀬自然保護区における東面登山道の現状を把握するための調査である。

尾瀬自然保護指導員ネットワーク

委員会の田中和夫氏の御土産に、櫻山の面開きや豊かな資源森林の下草原 代表 高橋 喬

子、丸山あさや、足立雅一氏は、お手すりをかりて御用意された御用意を担当幹事 永島 勲

はじめに

至仏山東面登山道は、植生の保護・登山道の整備・植生の復元等の理由で、平成元年より閉鎖されていましたが、平成 9 年 8 月 1 日に再開されました。

ネットワークでは、昨年 8 月に第 1 回の東面登山道利用実態調査を実施し、再開における問題点を指摘しました。さらに、本年初めて試みられた残雪期の登山道閉鎖期間中（5 月 11 日～6 月 30 日）の利用実態調査も 5 月 16 日に実施いたしました。

至仏山は蛇紋岩という特異な地質により森林限界は 1700m と低く高山植物の宝庫としても知られています。交通の便も良く折からの登山ブーム年々登山者が増加し、登山道を外れて歩く入山者の踏みつけによる裸地化の拡大が心配されてきました。

今回の調査は、再開 2 年目における登山道整備と植生復元等が、どの程度実行されているのか。また、入山者のマナー等の利用実態も併せて調査を行い、再開における問題点や今後の課題を再度考えてみました。

Ⅰ、実施日 平成 10 年 7 月 17 日（金）～18 日（土）

前泊日帰り調査／天候：晴れ

Ⅱ、調査場所 至仏山東面登山道（至仏山頂～山の鼻）

コース：鳩待峠～小至仏山～至仏山～高天ヶ原～山の鼻

～鳩待峠

調査時間 鳩待峠発 7:30～山の鼻着 14:00

Ⅲ、調査者 永島 勲（埼玉県児玉町）

河野茂邦（福島県福島市）

松前雅明（福島県郡山市）

島上 健（東京都町田市）

若松 真（東京都大田区）

田中志朗（群馬県太田市）

Ⅳ、調査内容 調査対象山頂～山の鼻までの間の植生状況の調査である。

1. 登山道の整備状況

<南面登山道>

南面登山道（オヤマザワ田代～小至仏山）は、昨年と比較して整備が行き届いていた。高山植物の多い登山道沿いにはロープが張られているが、これを支える杭もシックリと固定されていた。

小至仏山頂直下の木製階段の延長や急斜面の山側には土壌の流失防止用の丸太を2本横に並べた柵が新たに取り付けられていた。しかし、ロープのない所は、この丸太は腰掛として休憩するのに都合の良い形となっているのが気になった。なお、途中の「原見岩」付近には木道用の丸太や製材が何個所も大量に荷揚げされていた。今後さらに登山道の整備が進むものと思われた。

<東面登山道>

東面登山道（至仏山～山の鼻）も南面登山道同様に整備は進んでいるが、急斜面のためかロープの緩みやロープを支える杭も倒れかかり、不安定さが目だった。これは、入山者が転倒回避のためロープに寄りかかるのも、原因の一つと思われる。

今回もこのようなケースを何回も目撃しました。今回、倒れかかっている杭を4本ほど整備しました。また、山頂から高天ヶ原にかけては、急斜面の山側には土壌の流失防止用の丸太を2本横に並べた柵が新たに整備されていた。

中間地点付近には、植生の保護や土壌の流失防止用に、金網に石を詰めた「蛇篭」が多数設置されているが、昨年と比較して、周りの土に埋もれつつあるのが気になった。これはある意味では土壌の固定化や安定化に効果があるようにも見えるが、それだけ土壌の流失が激しい事を物語っていると考えるべきであろう。

2. 植生復元状況

広範囲に裸地化したコース外の赤茶けた斜面（別紙地図の「D」付近）には、丸太による四角い囲みがあるが、ジョウシュウオニアザミやヤチカワズスゲ等の種子を播いたと思われるが、ここにも幼苗の緑らしきものは見当たらず、復元の様子は見とめられなかった。

また、現地は急傾斜地にも拘わらず、播種した種子の流失防止策となるべき「ワラゴモや竹串」も見当たらない。別紙資料によれば、平成8年よりポットに「ピートモス+現地の土の混合物」に播種する実験を行うとあるが、実際にどんな方法で植生復元を行っているのであろうか。これらの状況から植生復元作業（実験）は、进展しておらず、中断されているものと思われる。

別紙資料にあるように、登山道再開の時期は閉鎖時点で既に決められており（平成10年3月8日の尾瀬保護財団のボランティア総会にて下山事務局長も同様な発言

をしていた)、【再開にあたって事前に学識経験者による植生復元の状況の確認及び地元関係者等による、登山道安全対策状況確認のための調査を実施し、植生保護及び安全性確保に万全を期す。】と、明記されている。この時、ネットワークからは本戸信男氏が調査に参加し、再開の問題点を指摘したが、先に再開日を決定してからの確認調査では、本末転倒の再開であると言わざるをえない。

3. 入山者の利用実態

総じて入山者のマナーは良かったが、登山装備の面で2000メートルの山には不似合いな軽装（街歩き用の靴やザック無し＝手提げバック等）の入山者が何人か見られた。この様な軽装備は、天候が悪化した場合、極めて危険である。

3連休の初日で晴天にも恵まれたためか、小至仏山山頂および至仏山山頂ともに、入山者で溢れて、休憩する場所もないほど混雑していた。

ゴミは量・種類ともに少なかったが、相変わらずキャンパーの包み紙とタバコの吸殻が目立ました。木道やロープを踏み越えて登山道外に出る人は、ほとんど見あたらなかったが、東面登山道では生理現象のためコース外の灌木帯に入り用を足す入山者が見られた。

4. 入山者への指導・啓蒙

鳩待峠の登山口には「尾瀬保護財団」の尾瀬ボランティア（監視員）2人が、入山者にコース状況の説明や登山届の指導等を行っていた。

V. 路上駐車の状況

津奈木から鳩待峠周辺には路上駐車なし。マイカー規制は完全に実施されている様である。

VI. 今後の課題と感想

1. 入山者急増への対応

まず、混雑期に山頂周辺では休憩や写真撮影等のために、登山道外の植生内への踏み込みによる植生の破壊が心配される。

今回の調査では東面登山道の下りで渋滞が発生するほど、入山者の行列が続いて一部で登山道の外で休憩する人が見られた。このため、ロープや杭の定期的な整備は今後も必須であると痛感した。

今年から始まった残雪期の登山道閉鎖は、植生保護の観点から極めて好ましい施策であり、高く評価したい。今後も残雪期の閉鎖は継続して実施されることを望む。しかし、その反動として閉鎖解除後に入山者が集中する傾向が高まってくるであろう。

交通の便が良く花の百名山として人気のある至仏山の入山者急増への対策として、植生保護も含めて、理想的には「登山道を再閉鎖」すべきである。これが困難であれば次善の策として「至仏山の入山規制」を早期に検討・実施すべきである、と訴えたい。

また、尾瀬は誰でも手軽に行けると思われがちであるが、至仏山の標高は2000メートル以上あり、上部は蛇紋岩という硬く滑り易い岩上にコースがあり、スリップや転倒等の事故が多い。特に入山者の事故防止の観点からも、高齢者や山慣れなない人には極めて危険なコースである事を、入山者や観光業者に対して更なるPRが必要であると感じた。

2. 植生復元への本格的な取り組みを

平成4年より専門家に委託して植生復元の実験を行っている様であるが、まだ実験の域を出ておらず、復元はまったく進んでいない様子である。この状態ではいつになら綠が戻るのか、はなはだ心配である。

植生復元の状況を昨年と今年の計3回調査した結果からみると、平成9年の登山道再開は、入山者を迎える事を最優先し、植生の保護および復元を軽視したものと言わざるをえない。急傾斜地で岩も多く、表土の流失も激しく、このまま放置しておくと植生復元は、一層困難になるものと思われる。

アヤメ平の様に、東面登山道でも早急に「本格的な植生復元作業」を実施すべきである、と提言したい。また、植生復元作業の状況も定期的に情報公開をして頂きたい。

素人考であるが、森林限界より標高の低い場所では、現地の急斜面を考慮した場合「草」と限らずに、周辺にある「灌木や笹」類も植生復元の対象植物として利用する方法はないだろうか。

2. 現地調査

まとめ

昨年と今年の計3回の現地調査を通じて思うことは、入山者の増加に至仏山（特に高山植物）が悲鳴をあげているのではないか、と痛感する。私達（入山者や全ての関係者）は、この貴重な尾瀬の自然を後世に伝える義務と責任がある。尾瀬の自然に対して、より謙虚に且つより慎重な行動が求められている。

「特別保護地区」並びに「特別天然記念物」の指定を受けている尾瀬を、これ以上絶対に観光地化してはならない。尾瀬には物見遊山で訪れる観光客に迎合する様な恒久施設は必要ないと常々感じている。尾瀬の生態系を保護することを最優先にした抜本的な施策（登山道閉鎖や入山規制等）が、着実に実施されるよう願ってやまない。

以上

10年6月9日の尾瀬保護所長のアンケート結果にて、中野良也様は発言

年次別整備圖

年次別整備義

